

## 2 瓦塔にまつられた仏像

奈良国立文化財研究所  
大 脇 潔

### 1 はじめに

今回出土した三尊像（巻頭カラー1、図版18）は、尊仏と同様の技法で作られたものである。しかし、いわゆる尊仏とは用途が異なり、瓦塔初層の内陣に見立てた壁面にはめ込んだものと推定される。このような例は管見によればさほど知られておらず、適切な名称もないようである。そこで、とりあえず尊仏の中に含め、その特殊な使用法のひとつとして後考をまとう。また、これ一例だけでは、なかなかその製作年代や製作地を明らかにすることもむずかしいが、幸い、おなじ原型から起こした型を用い、同様な技法で瓦塔の壁面を装飾した例が兵庫県三木市和田町の正法寺山遺跡から発見されている。<sup>注1</sup>そこで、まず両者の観察から得られた知見を紹介するとともに二・三の類例をあげ、あわせて瓦塔にまつられた仏像の今後の研究の見通しについてふれたいと思う。

### 2 三尊像の観察

三尊像をあらわす瓦塔の断片は、縦12.6cm、横9.0cmの大きさがあり、板状部の平均的な厚さは1.3cm、中尊像の蓮華座での最大の厚さは2.0cmである。表面には天蓋と三尊像をあらわしているが、そのまわりは指ナデで丁寧に仕上げている。裏面中央には指頭圧痕が残り、まわりには粗い指ナデの痕跡がある。側面の破面に残る痕跡とあわせ考えると、型に長方形の粘土板を当てて型抜きし、それをあらかじめ別に製作中であった内陣の壁の一部に開けた窓にはめ込み、接合用の粘土を足しつつ仕上げたものと思われる。この方法を仮にA手法と呼ぶことにしよう。

中尊 やや先端が尖り気味の二重の円形の頭光を負い、線刻で受花をあらわした蓮華座上に坐す。脚部の表現はいまいで結跏趺坐の形を正確にあらわしてはおらず、一見すると倚像のようにも見える。しかし、足先が表現されていないので、むしろ衣文を裳懸座風にあらわしたものと理解しておきたい。頭部の表現もはっきりせず、目鼻だちも明瞭ではない。左手は左の膝頭におき、右手は肘を屈して掌を胸前におく。着衣形式は判然とせず疑問点も多いが、一応通肩風に大衣をまとったものと見られ、下半身に裙裾をつける。腹部の衣文が省略されたためか左肩から右脇へ斜めに走る衣文が目立ち、菩薩像の天衣のようにも見え、そのように見ると首や腕にも装飾らしき表現があり、即如来像とは断定できない。しかし、後述するように、左に観音菩薩像、右に勢至菩薩像を従えていることなどから、一応阿弥陀如来坐像をあらわしたものと考えられる。

右脇侍 円形の頭光を負い、腰をわずかに左に（中尊側）にひねって蓮華座（連弁の表現はほとんど残っていない）上に立つ。頭部と目鼻だちの表現はその存在が知れる程度に簡略化されている。右手は体側に沿って垂下するが、かすかに水瓶を持つ表現が残されており、勢至菩薩をあらわしたものであることがわかる。左手は肘を屈し掌を胸前におく。両肩に天衣を掛け体側に沿って垂下、下半身には蓮肉上面にまで至る折り返し一段の裳をつける。

左脇侍 これも円形の頭光を負い、蓮華座上にはぼ直立する像である。頭部には三方への隆起が認められ、三面頭飾をあらわしたもののようである。眼・鼻・口・耳の表現は簡単ではあるが他の像にくらべればもっとも整っている。左手は体側に沿って垂下し、右手は肘を屈して掌を胸前におく。これまた両肩に天衣を掛け、下半身には裳をつける。両足の五指と蓮華座の受花は、型から抜いた後に線刻であらわしている。観音菩薩と思われる。

天蓋 三尊像の頭上には、璎珞を飾る天蓋がある。上方が瓦塔壁体にはめ込まれた際の指ナデによって一部擦り消され

ているが、他の尊仏・押出仏などの例から推定すると、頂部に大形の宝珠を飾り、そこから左右にのびる蓋の先端にも小形の宝珠を飾る天蓋と思われる。さらに天蓋からは、玉を弧状に連ね、それぞれの取り付け部には房状の飾りを先端につけた大形の垂飾が5組、弧状に垂れ下がる玉飾りの最下部には小さな垂飾を4組飾る。

三尊像の製作年代 この像に似た三尊形式の尊<sup>注2</sup>仏や押出<sup>注3</sup>仏は、わが国から出土したものだけでも、およそ16形式ほどが知られている。その多くは、中尊を倚像とし、坐像とするのは本像を含め4例だけである。また、7世紀末までに原型が製作されたと考えられる三尊形式の尊<sup>注2</sup>仏や押出<sup>注3</sup>仏と比較すると、中尊の坐像形式や着衣形式に代表されるように、図様全体にあいまいな表現がめだつ点がまず指摘できよう。したがって、原型の製作年代は8世紀に入るのではないかと思われる。直接比較できる例は少なく、材質も規模も異なるが奈良県奈良市大和田町の滝寺磨崖<sup>注4</sup>仏に一脈通じる表現が認められ、年代を考える上で参考になると思われる。

なお本像の製作は、陽刻原型から起こした土製の雌型によると思われるが、図様のあいまいな点が多いことから、数回の踏み返しの過程を経た可能性も考えられる。また、他の瓦塔には、内陣の四壁に数種類の如来像や菩薩像をあらわした例が多く、石名田木舟遺跡でもこれ以外の仏像をあらわした断片が将来発見される可能性が高い。

### 3 瓦塔にまつられた仏像の類例

瓦塔の軸部初層に仏像をあらわした例は、たしかにその数が少ない。しかし、本格的な木造層塔の初層内部にまつられた塔本塑像や塔本四仏とおなじように、稚拙とはいえ信仰の対象を瓦塔の中に表現した例として注目され、瓦塔の用途を考える際、見過ごすことのできない貴重な資料といえる。以下、管見に入った二・三の例について紹介する。

(1) 兵庫県三木市和田町正法寺山遺跡出土瓦塔 加古川左岸の丘陵から出土した瓦塔で、軸部と屋蓋部の断片がある。軸部の断片のうち、3点に型から起こした仏像がみられる。<sup>注5</sup>

断片A（図版19-3）は三尊像と天蓋をあらわし、石名田木舟遺跡出土例とおなじ原型から起こした型から製作したと思われるもので、出土した時には金箔が残っていたと伝えられている。断片は縦10.5cm、横8cmのほぼ長方形を呈し、左右と上辺に指ナデと剥離痕が残っているので、これもA手法で製作したものと推定される。型への粘土の押し込み方の強弱にもよるのであろうが、仏像の細部には石名田木舟遺跡例にくらべわずかに不鮮明な箇所が認められる。また細部には微妙な違いもあるが、ほぼ同範と認定してさしつかえない作品である。

断片B（図版19-4）は、菩薩像の胸から上だけを残す例であるが、尊<sup>注2</sup>仏や押出<sup>注3</sup>仏におなじ原型から起こしたとみられる作品が6例知られており、筆者はかつてこの一群を同原型資料E群と呼んだことがある。<sup>注6</sup>

これらを参考にすると、この菩薩像は、円形の頭光を負い、蓮華座上に直立する次のような観音菩薩立像に復元できる。頭光は上方と左右に火焰光を、内部に蓮華文を配していたこと、頭上には左右に花文を、中央に大きな化仏を飾る頭飾をつけていたこと、右手は肘を屈し、胸前で掌を前方にして五指をのばし、左手はほぼまっすぐ下げて水瓶を握っていたこと、両肩には垂髪がかかり、その下から天衣を体側に沿ってひるがえしていたこと、下半身には裳をつけ、腰紐中央の花文から二条の瓔珞をまっすぐ飾っていたこと、などである。この他に、胸飾・腕釧などをつけ、小像ながらかなり詳細的確に観音菩薩像をあらわした作品であり、その原型が最初に作られた時期は7世紀末と推定される。本像は、これらの同原型資料と比較すると、頭光の蓮華文が消えていること、化仏や顔立ちの表現があいまいになっている点などに、型の踏み返しによる図像の省略と改変がうかがえ、同原型資料中もっとも後出する作品と考えられる。

なお、本像下半の剥離部分から判断すると、その貼り付けの手法は断片Aとは異なり、壁体の一部を浅く彫りくぼめ、そこへ型から起こした薄い仏像部分を貼り付け、周囲を指ナデして仕上げたものと考えられる。これをB手法と仮称する。

断片世紀（図版19－5）は、化仏形の千仏像を上方にあらわし、下に別の仏像を貼り付けた痕跡を残す。千仏像は、円形の身光と頭光を負う如来坐像を簡単に表現したもので、上下2段に5体ずつ計10体の千仏像を一連の型から起こしたものである。まわりは指ナデが加えられているので判然としないが、下半の別の仏像の剥離痕跡からすると、この千仏像もB手法によって貼り付けたものと推定できる。このような千仏像は、押出仏や埴仏に類例が多いが、同原型資料といえる例は指摘できない。

以上、A・B・世紀3断片から推し量ると、正法寺山遺跡出土の瓦塔初層にも、軸部とは別に製作された内陣があり、その四壁に阿弥陀三尊像や観音菩薩像、千体仏や他の尊像を適宜配した形が復元できる。

(2) 静岡県引佐郡三ヶ日町宇志山中出土瓦塔例 この瓦塔は、相輪部をのぞく各部の断片をもとにほぼ完形に復元された数少ない例で、奈良国立博物館に昭和41年から展示されよく知られている。<sup>注7</sup>

仏像は、初層内に納めた箱形の内陣の壁面に型抜きしてあらわす。壁面の内側を観察すると、仏像の部分だけがくぼんでおり、壁体の外側に型を当て、内側から指で押して仏像の形を浮き出させたものと思われる。これを世紀手法と呼ぼう。内陣は、高さ14.6cm、幅13.0cm、厚さ0.7cmの粘土板4枚を組み立てた底の無い箱形につくられており、そのうちの3面に仏像の一部が残る。一番残りが良い面には、高さ7cm、幅2.3cmの菩薩立像と、もう1体の仏像の一部が残る。むかって左の1体はほぼ完形であるが、むかって右の仏像は、台座の下端と頭部・頭光の一部だけが残し、両者が同じ型から起こされたものかどうかは不明である。菩薩立像は円形の頭光を負い蓮華座上にほぼ直立し、右手は胸前にあげ、左手に水瓶をもつ。<sup>注8</sup>後述する愛知県音楽寺廃寺出土例と同原型資料である。他の2面には天蓋の一部が残るだけであり、4壁にどのように仏像が配置されていたかを復元することは困難であるが、2～3種類の型を使用して1面に2体ずつ仏像をあらわしたものではないかと想像される。なお、この瓦塔の製作年代については、これまで平安時代と考えられてきたが、猿投窯の黒笹8号窯出土のものに形態が似ているなどの点から、奈良時代の770年ごろを中心とする年代が与えられている。<sup>注9</sup>

(3) 愛知県海部郡甚目寺町新居屋遺跡出土瓦塔 白鳳時代の寺院址である法性寺廃寺から出土した瓦塔の、内陣と思われる断片上に2体の仏像を型抜きしてあらわす。<sup>注10</sup>両者とも、仏像の周囲を長方形の板状に整形し、仏像部分を内陣の壁体に貼り付けた状態にあらわす特徴がある。これをD手法と仮称しておこう。むかって右の仏像は、正法寺山遺跡出土の断片Bに残る菩薩立像と同じ原型から起こした同原型資料のE群に属す。しかし、化仏の大きさや火炎光の位置に若干違いが認められ、その型の複製は正法寺山遺跡例や三重県天華寺廃寺出土の埴仏例とは別の過程を辿ったものと考えられる。<sup>注11</sup>むかって左の仏像は、天蓋の下に頭光をつけ、蓮華座上に直立する如来立像をあらわすが、今のところこれと同じ原型から作られた埴仏や押出仏は知られていない。

(4) 愛知県江南市村久野音楽寺廃寺出土瓦塔 音楽寺廃寺は、白鳳時代に創建された寺院址で、法起寺式の伽藍配置をもつと考えられている。<sup>注12</sup>瓦塔の大形破片とともに、仏像を型抜きした3点の断片が発見されている。埴仏とみなされているようであるが、断片周辺の割れかたと同原型資料の存在から、これも瓦塔初層の内陣を飾ったものであろう。

断片Aは、菩薩立像の上半身を残すもので、正法寺山遺跡出土の断片Bや新居屋遺跡例とおなじ原型から起こした型からつくられたもので、同原型資料E群に属す。3者とも細かな差異があるが、新居屋遺跡例が原型に最も近く、音楽寺廃寺例がそれに次ぎ、正法寺山遺跡例は型の複製過程を異にすることは先述したとおりである。

断片Bは、菩薩立像の全身が残るもので、三ヶ日町出土瓦塔と同原型資料である。これもさほど図様が鮮明ではないが、左手に水瓶を持っていることが三ヶ日町出土瓦塔よりはっきりしている。仏像をあらわす長方形の部分が壁面より一段高く作られており、新居屋遺跡例とおなじD手法によるものと考えられる。

断片Cは、蓮華座上に結跏趺坐し偏袒右肩に大衣をまとった坐像をあらわしたもので、上方に天蓋を飾り、頭光と身光を負い両手を衣中に納めた化仏形にあらわす。はればったい表情に特徴がある他に、右腕に腕釧と臂釧をつけたとみられる表現があって注目される。今のところ、これとおなじ原型からつくられた尊仏や押出仏は見いだされていない。

(5) 愛知県西加茂郡三好町黒笹8号窯出土の土製仏像<sup>注13</sup> 瓦塔屋蓋部の大きな破片とともに、高さ8.6cmの土製仏像と思われるものが出土している。その表現はきわめて簡単であり、左手に水瓶と思われる袋状のものを持っていなければ、仏像とは誰も思わないほどのものである。右手は軽く曲げて前方に伸ばし、目鼻だちも簡単にではあるが線刻であらわしている。瓦塔に立体的に表現された仏像を安置する例があったことを示す貴重な一例といえよう。

(6) 愛知県名古屋市緑区鳴海町N N259号窯出土の埴仏型<sup>注14</sup> 平安時代の灰釉陶や緑釉陶素地・須恵器を焼成した窯の、窯体掘方から出土した埴仏型が1点知られている。縦4.5cm、横3.9cmの小さなもので、天蓋の下に結跏趺坐し身光と頭光を負う如来坐像を陰刻する。この窯で大量の埴仏を生産した形跡もなく、近くの窯で生産された瓦塔に附属する仏像の製作に使用されたものが混入したものかと想像される。これも、同原型資料は知られていない。

(7) 長野県飯田市竜丘前林廃寺出土瓦塔<sup>注15</sup> 瓦塔の破片とともに、線刻で高さ20cmほどの仏像をあらわした須恵質の板状断片が17片ほど発見されている。これも瓦塔の内陣に仏像を表現した例とみられる。

#### 4 まとめにかえて

今回の三尊像の発見を契機とした検討の結果、瓦塔にまつられた仏像の存在が明らかになるとともに、今後の研究の見通しについても若干の手がかりを得たので簡単にまとめておきたい。

(1) 石名田木舟遺跡で発見された瓦塔にまつられた仏像と、その関連資料の存在によって、これまでの瓦塔研究の中で見逃されてきたいくつかの課題が明らかになった。そのひとつは、瓦塔の初層に様々な方法で表現された仏像をまつることが決して特殊な例ではなく、とくに、東海・北陸地方以西ではかなり普遍的なものであったという見通しが立てられた点にある。

(2) 奈良時代の宝亀年間(770~780)に建立された西大寺の東塔には、釈迦・阿弥陀・宝生・阿閼如来の4体の如来坐像が安置されていたと伝えられている。このような本格的な木造層塔の初層内陣に安置された塔本四仏を模して、瓦塔の場合も、内陣壁体の4面に三尊像、あるいは如来の坐像や立像、菩薩立像・千体仏など、さまざまな仏像がまつられたのであろう。仏像を表現した瓦塔は、塔の外観だけでなく、より本格的に木造塔を模倣しようとして作られたものであり、その代用品としての性格がより強く感じられる。火舎・水瓶・香炉などの仏教的色彩の強い遺物も伴出しており、この瓦塔が出土した石名田木舟遺跡のどこかに、この瓦塔をまつる小規模な寺院が存在したことは疑いない。

(3) 瓦塔にまつられた仏像の表現形式には、1、型を利用して浮き彫り風に仏像をあらわす方法、2、稚拙な土製ではあるが、立体的に仏像を造形する方法、3、線刻で壁体に仏像をあらわす方法があることが判明した。この他にも墨描きなどの方法や、残りにくい材質でつくられた仏像の存在も当然想像される。また瓦塔だけでなく、近年その存在が明らかになった「瓦堂」・「瓦金堂」にも、その本尊としての仏像が必要である。いかなる材質のどのような仏像であったのかの検討が必要であろう。

(4) 型を利用して仏像を瓦塔に表現する方法を細分すると、A～D4手法があることが判明した。正法寺山遺跡の瓦塔では、このうちのA・B両手法が共存しており、必ずしも手法の違いが製作時期や製作地の違いに結び付くか否かは不明であるが、新資料発見の際には注意する必要がある。また、同原型資料の仏像をあらわす場合は、その軸部や屋蓋部の表現型式や技法についてこれまでの研究成果<sup>注16・17</sup>にもとづく再検討が必要である。この作業によって、従来の瓦塔の製作年代や製作地をより詳しく論じることができると思われるからである。

(5) 型を利用して仏像をあらわす瓦塔の製作地のひとつが、猿投山古窯址群にあることははっきりした。ここから東海地方を中心に瓦塔が供給されたのであろうが、一方、越中と播磨、直線距離にして300キロ近く離れたふたつの瓦塔を結ぶ環があるのかどうかという、はなはだ興味深い問題が残されることになった。両者がいつ、どこで、誰によって作られたのか？この答はすぐには得られそうもないが、そのために、このふたつの瓦塔についてのさまざまな観点からの研究が必要と思われる。

#### 注・参考文献

- 1 辰馬考古資料館編 『兵庫の古代寺院跡Ⅰ 昭和57年度秋季展』 1982年
- 2 大脇潔 「埴仏とその製作年代」『特別展 埴仏 ―土と火から生まれた仏たち―』 倉吉博物館 1990年
- 3 奈良国立博物館編 『押出仏と仏像型』 1983年
- 4 奈良市教育委員会 『奈良市石造遺物調査報告書』 1989年
- 5 前掲注1文献
- 6 大脇潔 「埴仏と押出仏の同原型資料―夏見廃寺の埴仏を中心として―」『MUSEUM』第418号 東京国立博物館 1986年
- 7 稲垣晋也 「静岡県引佐郡三ヶ日町志山中発見瓦塔の復元について」『考古学雑誌』第53巻―第1号 日本考古学会 1967年
- 8 名古屋市博物館 『発掘された東海の古代 律令制下の国々』1994年
- 9 奈良国立博物館 『奈良国立博物館名品図録 増補版』1993年 三ヶ日町出土瓦塔の調査に際しては奈良国立博物館の井口喜晴氏に時間を割いていただくとともに、多くの御教示を得ました。記して感謝の意を表します。
- 10 名古屋市博物館 『尾張の古代寺院と瓦』 1985年
- 11 三重県教育委員会 『昭和五四年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 1980年
- 12 前掲注8文献
- 13 愛知県教育委員会 『愛知県猿投山西南麓古窯址群黒笹地区古窯址分布現状調査報告』 1956年
- 14 名古屋市教育委員会 『緑区鳴海町字赤松所在 NN-259号窯跡発掘調査報告書』 1989年
- 15 遮那真周・遮那藤麻呂 「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49号 1984年
- 16 松本修自 「小さな建築 ―瓦塔の一考察―」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年
- 17 高崎光司 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻―第3号 日本考古学会 1989年